

[成果情報名]肥育豚の市販配合飼料に麦茶粕の原物を10%混合して給与できる

[要約]食品製造粕の麦茶粕を原物のまま10%量を市販の配合飼料に混合し、体重30kgの肥育前期から出荷の時期まで肥育豚に給与すると、配合飼料と同等に摂取し飼料費が低減でき、成育や肉質、食味も配合飼料を給与した豚と同様に良好である。

[キーワード]肥育豚、麦茶粕、

[担当]三重畜研・中小家畜研究課

[代表連絡先]電話 0598-42-2029 E-mail : ichikt02@pref.mie.lg.jp

[区分]関東東海北陸農業・畜産草地(中小家畜)

[分類]技術・参考

---

### [背景・ねらい]

農畜産物に対する消費者ニーズは多様化し、より安全性が高く、高品質で生産者の顔が見える安心な畜産物が求められている。また、低炭素社会づくりや自然共生社会づくりにもつながる循環型社会を構築していくため、廃棄物の発生抑制や質に着目した循環利用を推進することが求められている。

本研究では、県内の食品会社から産出される麦茶粕を養豚用飼料として用いて、生産コストの低減と良質な豚肉の生産を目指したものである。

### [成果の内容・特徴]

1. LWD 交雑種雌の肥育豚を豚房で群飼して体重30kgから110kg程度まで不断給餌、自由飲水とする。
2. 肥育豚に市販の配合飼料に麦茶粕を原物量で10%混合した麦茶粕10%飼料を給与、対照飼料は市販の配合飼料を給与する。
3. 飼料の栄養成分は表1のとおりとする。
4. 飼養成績は、麦茶粕10%飼料給与の豚と対照飼料給与の豚に差は見られない(表2)。
5. 枝肉成績では、枝肉歩留が麦茶粕10%飼料給与の豚は対照飼料給与の豚と比べ減少が見られ、このことは背脂肪厚の減少によるものと思われる(表3)。
6. 豚肉の粗たん白質や粗脂肪などの養分含量やドリップロスなどの理化学性状は、麦茶粕10%飼料給与の豚肉と対照飼料給与の豚肉に差は見られない(データ省略)。
7. 豚肉の食味評価では、麦茶粕10%飼料給与の豚肉と対照飼料給与の豚肉の差は見られずどちらも評価は高い(図1)。
8. 対照飼料を給与した量の飼料価格を100として麦茶粕10%飼料の価格を示す飼料の経済指数は96.8と低くなる。

### [成果の活用面・留意点]

1. 麦茶粕は水分67.6%、粗たん白質5.0%、粗脂肪1.3%、粗繊維4.4%、試験用として畜産研究所が5円/kg(原物)で購入したものである。
2. 麦茶粕を混合する飼料は給餌箱の中で固まるなどの不具合がない原物10%量配合とする。
3. 原物麦茶粕を配合飼料に混合すると粒になる麦茶粕が見られるため、自動給餌機を使用する場合、給餌ライン中に張り付いて残るなどの可能性があるため留意する必要がある。
4. 食品残さを飼料化する場合、飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律を遵守する。

## [具体的データ]

表1 飼料の栄養成分

(単位:原物中%)

処理	水分	粗たん白	粗脂肪	粗繊維	粗灰分	可溶性無窒素物
麦茶粕10%飼料	17.7	14.3	4.0	3.3	4.1	56.7
対照飼料	12.1	15.3	4.3	3.1	4.4	60.7

表2 飼養成績

処理	開始体重 (kg)	終了体重 (kg)	1日増体重 (kg)	飼料摂取量 (kg/日)	乾物摂取量 (kg/日)	飼料効率 (乾物)
麦茶粕10%飼料給与	33.6	113.5	0.917	3.64	3.00	0.306
対照飼料給与	34.3	114.0	0.947	3.63	3.19	0.296
P値	0.71	0.76	0.47	0.93	0.09	0.24

供試数:各区8頭1反復

表3 枝肉成績

処理	出荷日齢 (日)	枝重 (kg)	枝肉歩留 (%)	背脂肪厚(cm)		
				カタ	セ	コシ
麦茶粕10%飼料給与	159.3	72.1	63.5	2.8	1.6	2.7
対照飼料給与	155.9	73.6	64.5	3.4	1.7	3.1
P値	0.42	0.23	0.05	0.05	0.42	0.16

供試数:出荷日齢は各区8頭1反復

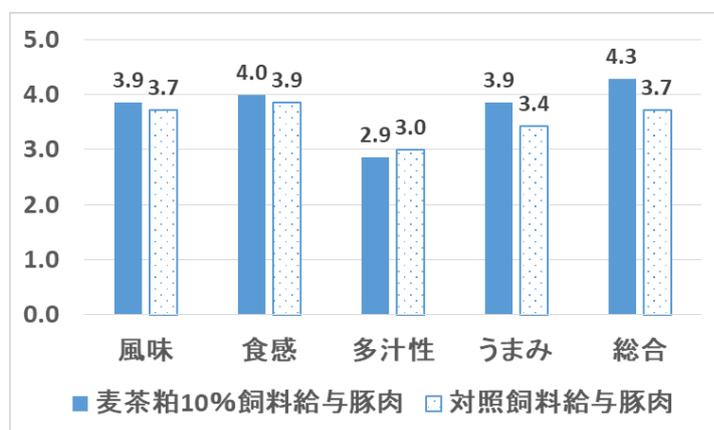


図1 豚肉の食味評価

研究所職員14名で食味の好ましさを5段階で評価する

(市川隆久)

## [その他]

研究課題名: E C O畜産物供給体制構築事業—肥育豚への麦茶粕給与試験—

予算区分: 執行委任

研究期間: 2020~2023年度

研究担当者: 市川隆久、黒田克利

発表論文等: